

## 青年期における家族内コミュニケーションと無気力感の関連

君嶋 志保美

### 1. 問題と目的

家族の変化の中で、青年期において、青年はそれまで依存関係であった親との独立を図る時期であり、親自身もそのような青年を抱えながら家族を再構築することになり、どちらにおいても葛藤の時期である。そのような時期である青年において、平石（2000）は、青年期後期の親子関係が子どもの対人意識やアイデンティティに大きく関連することを述べている。また、青年期では、「ひきこもり」や「フリーター」などの増加が問題視されている（大芦・鎌原，2012）。「やる気が出ない」「意欲がわからない」などといった無気力感を主訴とする学生は多く、単純にうつ病によるものもあれば、自己の傷つきにより、大学生活から回避するアパシーの問題など、語る背景はさまざまであるとされている。このように、将来を見据えた青年において、この時期は葛藤が多く、意欲低下などの無気力感に陥りやすいことが考えられ、学生時代の無気力感を改善もしくは予防の手立てが重要になると考えられる。

一方、狐塚（2011）の研究より、親との肯定的コミュニケーションをとることによって、青年の精神的健康を維持することが示唆された。また、花嶋（2007）によって、父子間の関係が青年の精神的健康に好転をもたらすことが示唆されているが、夫婦関係や母子関係の関わりを踏まえた研究は未だ数が少ない。よって、本研究では、父子間の肯定的コミュニケーションがもたらす青年の無気力感との関連をその他の家族関係も踏まえて検討することを目的とする。

### 2. 方法

質問紙調査を行い、対象者は関東圏内の私

立大学に通う大学生293名とした。質問紙は、狐塚（2011）による各家族関係における直接的コミュニケーションの測定（青年から父親へ、父親から青年へ、青年から母親へ、母親から青年へ）と親から青年への媒介伝達の測定（父親の青年への評価を母親が伝える）を取り上げ、下坂（2001）による無気力感尺度との関連を検討した。また、自由記述による父親・母親との普段の会話について回答を求めた。

### 3. 結果

因子分析により、無気力感尺度において「疲労・孤独感」、「将来への否定的展望」、「自他への積極的関心」という3因子が認められた。次に、両親と同居しているか否かにおける家族内コミュニケーションの下位得点を、 $t$ 検定により検討した結果、同居しているか否かによる差は認められなかったため、両親と同居しているか否かにおける家族内コミュニケーションとの差はないと判断し、分析を進めた。また、父子間の肯定的コミュニケーションがもたらす青年の無気力感との関連をその他の家族関係も踏まえて検討した結果、青年の「将来への否定的展望」と父子間のコミュニケーションに負の相関が認められた。分散分析の結果より、青年から父親への直接的コミュニケーションにおける「疲労・孤独感」と「自他に対する積極的関心」では、無気力感が低い青年の方が高い青年よりも父親に対する直接的コミュニケーションが多く、「将来への否定的展望」では、女子の方が男子よりも父親に対する直接的コミュニケーションが多いことが示された。次に、父親から青年への直接的コミュニケーションにおける「将来への否定的展望」では、女子の方が男子より

も父親から青年に対する直接的コミュニケーションが多く、「自他に対する積極的関心」では、無気力感が低い青年の方が高い青年よりも父親からの直接的コミュニケーションが多いと示された。青年から母親への直接的コミュニケーションにおける無気力感では、女子の方が男子よりも青年から母親への直接的コミュニケーションが多く、「自他に対する積極的関心」では無気力感が低い青年の方が高い青年よりも母親への直接的コミュニケーションが多いことが示された。一方、母親から青年への直接的コミュニケーションにおける「将来への否定的展望」と「自他に対する積極的関心」では、無気力感が低い青年の方が高い青年よりも母親からの直接的コミュニケーションが多いことが示された。「疲労・孤独感」においては、交互作用が認められ、単純主効果による検定の結果、無気力感が低い青年かつ女子のほうで母親からの直接的コミュニケーションが多いと示された。最後に父親からの肯定的媒介伝達における「将来への否定的展望」と「自他に対する積極的関心」では、無気力感が低い青年の方が高い青年よりも父親からの肯定的な媒介伝達が多いと示された。

#### 4. 総合考察

結果より、父子間において直接的コミュニケーションは青年の無気力感の低下と関連があることが示唆されたと同時に、家族という三者間の関係を好転させる役割も担っていることが示唆された。また、父子間の直接的なコミュニケーションが好転するために重要な関わりとして、父親と青年が共通した話題を介してお互いに接する機会を増やすことでも示唆された。共通の話題を用いることによって、父子間の直接的コミュニケーションが促進され、青年が感じる孤独感が低下し、自己や他者への関心が高まり、無気力感の低減に関連があると考えられる。また、青年の無気力感には母親からの肯定的な媒介伝

達も大きく関連しているが、母親から父親の評価について伝えられる機会は少ないことが明らかとなった。しかし、父親から肯定的な媒介伝達が母親から青年に話題として取り上げられる際は、夫婦関係においても青年の肯定的評価が話題となることが予想され、それによって夫婦関係が良好になる可能性が高いと考えられる。また、父親の肯定的な評価を母親からも青年に伝えられることによって、青年が両親から肯定的に認知されていると感じることができ、その結果、青年の無気力感が低減されると考えられる。

本研究では、両親が青年を肯定的に評価し、直接的にあるいは間接的に伝えることにより、青年の自己認識や将来に対する肯定的な捉え方を向上させ、そして青年が抱く孤独感を低減させることができると明らかになった。青年期の無気力感の問題として取り上げられている「ひきこもり」や「ニート」など課題に対し、家族の肯定的なコミュニケーションを行うことで、青年が抱える無気力感を低減させ予防することにつながると考えられる。

#### 引用文献

- 花嶋裕久 2007 家族心理学研究 男性のひきこもり者から見た父子関係と父親から見た父子関係—ひきこもりの家族における父子—息子関係の諸特徴—
- 平石賢二 2000 家族心理学研究 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識アイデンティティとの関連
- 狐塚貴博 2011 家族心理学研究 青年期における家族構造と家族コミュニケーションに関する研究. 青年の認知する家族内ストレスからの検討
- 大芦治・鎌原雅彦 2012 シリーズ荒れる青少年の心 無力感の心理 無気力な青少年の心 北大路書房
- 下坂剛 2001 教育心理学研究 青年期の各学校段階における無気力感の検討